

5. 地域活動支援センター I 型における利用者の 生活ニーズ — 葛飾区の実態調査 —

○石川 誓子 (地域活動支援センターなぎ)
大矢由紀子 (地域活動支援センターもっく)
小林 正人 (地域活動支援センターコパン)
小沼 聖治 (聖学院大学 心理福祉学部)

【研究目的】

東京都葛飾区（以下、葛飾区）における地域活動支援センター I 型（以下、I 型）の利用者の生活状況やニーズを明らかにし、精神障害者がその人らしい生活を送るために I 型に求められる機能や役割について考察することを目的とした。

【研究の必要性】

葛飾区における I 型は現在 3 カ所設置されている。それぞれの I 型は、精神障害のある当事者や家族、地域住民の身近な相談窓口として、精神保健福祉分野の多種多様な相談援助に取り組んでいる。

そのような状況の中、長年の利用者の方々から「(I 型を利用して) 安心感が得られるようになった」「生活のメリハリがつくようになった」という言葉をいただき、精神障害者の生活の質の向上につなげるための I 型の役割を明らかにする必要性を感じるようになった。

一方で、新規登録者の方々より、「このような場所を初めて知った」「誰にも相談できなかった」という言葉を伺うたびに、I 型を知らずに一人で困難を抱えている人が潜在化しているのではないかと感じ、普及啓発の強化の必要性を感じた。そして、I 型の必要性を「みえる化」することで、利用者の生活の質の向上につながる支援や福祉サービス拡充への議論が活発化することを期待している。

【研究計画】

本研究は、2 段階で実施した。

第 1 段階として、葛飾区における I 型の利用者 9 名（各事業所 3 名ずつ）を対象とし、2020 年 2 月～4 月にかけて、半構造化インタビュー調査を行った。インタビュー調査は、個別で 30 分から 1 時間かけて行った。IC レコーダーで録音したデータをテキスト化したのち、利用者の生活ニーズに対する I 型の機能や役割に焦点化し、文章の精読を行った。そのうえで、オープンコーディングを用いて、意味のまとまりに着目した内容の整理、分析をおこなった。

第 2 段階として、インタビュー結果をもとに、I 型の登録者を対象にした質問紙調査を行った。質問紙調査は無記名にし、各事業所から対象となる登録者に返信用の封筒を同封し、自宅に郵送した。調査対象は、I 型利用者 390 名（コパン 145 名・もっく 119 名・なぎ 126 名）である。その結果、159 名（コパン 59 名・もっく 40 名・なぎ 60 名）の回収があり、回収率は 40.7%であった。

本研究の実施にあたって、共同研究者が所属する聖学院大学の研究倫理委員会の承認を得た。また、調査協力者に、研究の趣旨、匿名性など発表や調査に関する文書を提示し、説明を行ったうえで同意書を得た。さらにデータ収集後は初期の段階から匿名化を図り、収集されたデータは、研究終了後、速やかに復元不可能な状態にして破棄した。

【実施内容と結果】

第 1 段階の質的分析の結果、17 のサブカテゴリー、4 のカテゴリーを生成した。カテゴリーは、【安心できる居場所】【相談ができる】【生活のメリハリができる】【就労への移行・定着へのプラットフォーム】である。また、質的調査・分析の結果を踏まえ、第 2 段階として実施した質問紙調査の単純集計結果について、下記に示す。

1-① 性別

女性が 70 人（47.3%）、男性が 78 人（52.7%）でほぼ同数であった。

1-② 年齢

20～29 歳は 8 人（5.2%）、30～39 歳は 29 人（19.0%）、40～49 歳は 40 人（26.1%）、50～59 歳は 55 人（35.9%）、60～64 歳は 10 人（6.5%）、65 歳以上は 11 人（7.2%）であった。40 代と 50 代を合わせると、全体の 6 割以上であった。

1-③ 通所頻度

「毎週 1 日以上」36 人（24.0%）、「1 か月に 1～2 日程度」33 人（22.0%）、「半年に 1～2 日程度」22 人（14.7%）、「1 年に 1～2 日程度」33 人（22.0%）、「まったく通所していない」26 人（17.3%）であった。

1-④ 利用方法

「フリースペースの利用」51 人（37.2%）、「プログラム参加」19 人（13.9%）、「相談（電話・面接・訪問）」50 人（36.5%）、その他 17 人（12.4%）であった。利用方法として、最も多いのは「フリースペースの利用」であった。次いで、「相談（電話・面接・訪問）」となり、ほぼ同様の割合であった。

1-⑤ 地活以外で主に利用している事業所（複数回答）

「精神科デイケア」22 人、「就労移行支援」14 人、「就労継続支援 A 型」5 人、「就労継続支援 B 型」33 人、「自立訓練（生活訓練）」4 人、「他の地域活動支援センター」9 人、「とくになし」58 人、「その他」18 人であった。「とくになし」が最も多い人数であった。

1-⑥ 一般就労の有無

「就労している」24 人（15.6%）、「就労していない」130 人（84.4%）であった。

2. センターを利用して思うことについて：人数（％）

	そう 思う	やや そう思う	あまり 思わない	そう 思わない
① <u>スタッフは困った時に話を聴いてくれる。</u>	92 (63.9)	41 (28.5)	8 (5.6)	3 (2.1)
② <u>スタッフに受け入れられている。</u>	78 (53.4)	50 (34.2)	12 (8.2)	5 (3.4)
③ 他の利用者と気楽に過ごせる。	34 (24.3)	55 (39.3)	34 (24.3)	17 (12.1)
④ 他の利用者は、自分の話を聴いてくれる。	34 (24.1)	57 (40.4)	34 (24.1)	16 (11.3)
⑤ 他の利用者を受け入れられている。	32 (23.2)	54 (39.1)	36 (26.1)	15 (10.9)
⑥ <u>いつでも行ける場所があり安心感がある。</u>	67 (47.2)	46 (32.4)	17 (12.0)	11 (7.7)
⑦ プログラムで自分の好きなことができる。	34 (25.0)	49 (36.0)	43 (31.6)	10 (7.4)
⑧ 所属しているという気持ちになれる。	61 (43.3)	44 (31.2)	27 (19.1)	9 (6.4)
⑨ <u>自分のペースで過ごすことができる。</u>	65 (46.1)	51 (36.2)	19 (13.5)	6 (4.3)
⑩ 一人で気楽に過ごせる。	57 (40.7)	47 (33.6)	24 (17.1)	12 (8.6)
⑪ 幸せな気分になれる。	38 (27.5)	52 (37.7)	37 (26.8)	11 (8.0)

3. センターを利用して変化したと思うこと：人数（％）

	そう 思う	やや そう思う	あまり 思わない	そう 思わない
⑫ さまざまな活動を通じて、仲間ができた。	48 (34.0)	38 (27.0)	34 (24.1)	21 (14.9)
⑬ 悩みが軽くなった。	43 (30.5)	55 (39.0)	31 (22.0)	12 (8.5)
⑭ 知識や考え方の幅が広がった。	47 (33.8)	56 (40.3)	23 (16.5)	13 (9.4)
⑮ <u>一人で悩まなくてもよくなった。</u>	53 (38.1)	50 (36.0)	24 (17.3)	12 (8.6)
⑯ 制度やサービスの新しい情報が得られるようになった。	49 (36.3)	46 (34.1)	28 (20.7)	12 (8.9)
⑰ <u>地域の偏見や差別が少なくなった。</u>	22 (16.4)	47 (35.1)	39 (29.1)	26 (19.4)
⑱ 規則正しい生活ができるようになった。	49 (35.5)	52 (37.7)	27 (19.6)	10 (7.2)
⑲ <u>悩んでいるのは自分だけではないと思えるようになった。</u>	66 (47.8)	49 (35.5)	15 (10.9)	8 (5.8)
⑳ 生活にメリハリができた。	50 (36.0)	45 (32.4)	34 (24.5)	10 (7.2)
㉑ 体力がついた。	34 (24.6)	51 (37.0)	37 (26.8)	16 (11.6)
㉒ 楽しみが増えた。	42 (30.0)	61 (43.6)	25 (17.9)	12 (8.6)
㉓ 分かり合える友人・仲間ができた。	37 (26.8)	45 (32.6)	34 (24.6)	22 (15.9)
㉔ 生きがいを感じられるようになった。	36 (26.3)	51 (37.2)	29 (21.2)	21 (15.3)
㉕ <u>相談することができるようになった。</u>	60 (42.9)	48 (34.3)	15 (10.7)	17 (12.1)
㉖ 自分らしくいられるようになった。	48 (34.5)	49 (35.3)	27 (19.4)	15 (10.8)

※「そう思う」「ややそう思う」を合わせて75%以上の項目を でマークした。

4. 自由記述

利用者の生活状況やニーズに直結すると考えられた主な自由記述を示す。

- ・相談支援に、とても助けられています。
- ・地活の職員さんと、区内の街中で偶然に出会う事があります。その度に、同じ地域で生活しているという実感が、印象が強くなりとても心強いです。
- ・一人暮らしの人に時々電話して生存を確認してほしい
- ・スタッフさんが2年位で変わらないで欲しい。
- ・スタッフの方(相談員)が外出していることが多く、相談したい、困っている時に不在。
- ・もう少し 相談が 気軽に できたらなあと思います。例えば、立ち話のような2分3分の間になやんでいることが 話せたらうれしいのですが。
- ・地域活動支援センターに対する希望はコロナ騒動の中で工夫をこらして積極的に支援、連絡、連携してほしい。日頃感じることは休日など連絡したい時に思ったように連絡できないのでそれをどうにかしていただきたい。
- ・日常生活の中での課題の優先順位をつけることにとても役立っている。(助言をもらうことで…)
- ・人生勉強の話をしてもらいたい。

【考察と今後の課題】

アンケート調査からI型を利用している方は、通所主体である層とそうでない層がいること、通所の頻度も様々で(1-③)、通所自体にも様々なニーズ(「相談」「余暇活動」「仲間との交流」「生活のリズムづくり」「情報収集」)があることがわかる。このことはI型の相談援助が多種多様であることを表している。

そして、様々な利用形態があるにもかかわらず、多くの利用者にとって、I型は親身に相談に対応してくれるところであり、安心して通える場所になっていることが明らかになっている(2-①②⑥)。このことは精神疾患の特性だけでなく、彼らを取り巻く様々な環境要因から、人とつながれず、孤立化しているという背景が影響していると推察できる。I型につながるまでの孤立した状況は3-⑮⑱からも読み取れる。「相談」「居場所」という機能が、精神障害者にとって、生活を支える非常に重要な要素ということであり、自由記述からも当事者のその思いが伝わってきている。

特にI型しか利用していない方にとっては、地域につながる唯一のサービスであることから、そうした方の思いや相談にきちんと対応できるスタッフが常時いる体制の維持が、I型には何より求められていると考えられる。またI型を利用することは利用者個々の「相談する力」を身につけていることにも役立っている(3-⑳)。

当事者交流に意義があることも示唆されている(3-⑲)。近年ピアの力は様々なところで注目され、研修を受けたピアスタッフが活躍する場も増えてきている。そうした当事者交流をサポートしていくことも今後さらにI型に求められていくことだろう。

また、I型しかサービスにつながっていない利用者の中には、就労している人も含まれている(1-⑥)。その方たちにとってのI型は、そこで愚痴をこぼしたり、楽しいおしゃべりをする事で、就労のストレス軽減や明日への意欲となり、I型が就労の定着サポートを担っているということも十分に考えられる。今後、I型に登録している就労している方々に対し、さらに調査を行えば、就労定着するうえでI型が果たす役割がより明確になってくると思われる。

「一人で悩まなくてもよくなった」という声が多かったように、地域にはまだまだ孤立している精神障害者の方が多く存在しているのだろう。安心して地域で暮らせるように、今後さらに地域住民にI型の存在を伝える工夫をしていく必要があり、行政と協力しながらより有効な手段を検討していきたい。

そして、見落としとしてはならないのが、⑰の数値である。アンケートにはI型に対する意義を感じられる数値が多いと思われるが、偏見や差別を軽減できる状況にはいたっていないことを改めて突き付けられた。このことに対しては、当事者のその思いを受け止めながら、真摯に一步ずつ取り組んでいかなければならないと改めて感じた。

【経費使途明細】

使途	金額	備考
交通費	26,660	
ICレコーダー	22,638	3台
調査協力謝礼(2,000円×9人分)	18,000	
文字おこし費用	26,400	
通信費(アンケート郵送代)	69,954	3地活分
アンケート集計費用	10,560	
消耗品費	15,362	3地活分
製本代	109,780	萌文社
製本備品	3,146	
合計	302,500	
大同生命厚生事業団助成金	300,000	

※差額2,500円事業所負担とする